



コンピュータと創造性

前号にお掃除ロボットの話を書いたが、お掃除ロボットも「AI」を搭載することでどんどん賢くなっているらしい。ところが、そうになると私たち人間は勝手なもので、「コンピュータはどこまで賢くなるのだろうか？」と不安になったりするものだ。

ある人は、それは「コンピュータが学習する」とか「コンピュータが判断する」といった擬人化表現が世の中に氾濫する中で、その表現が私たちに違和感受け入れられるようになった結果、コンピュータをあたかも人間のように考えてしまっていることに一因があるのではないかと分析している。そこに、自らの意志を持つコンピュータやロボットが登場するSF映画の世界が結びついて、コンピュータの負のイメージが生まれるというわけだ。なるほど、説得力がある。

ところで、そのコンピュータだが、「私たち人間との一番の違いは何か？」と聞かれたら、どう答えるだろう。多くの人は「創造性」というキーワードを思い浮かべるのではないか。例えば、AIが世の中にあふれても、「創造的な」仕事はAIには取って代わられないといったことが言われたりするのもその現れであろう。

しかし、何気なく使っているこの「創造性」という言葉を、コンピュータとの関わりの中から新しい視点で見直した学者がいる。彼の考え方によれば、コンピュータも「創造性」を持つことになる。紹介してみよう。

*

独創性 (originality) や創造性 (creativity) は、人間とコンピュータを差別化するものとして、広く信じられているように思い

ます。現在計画されている教育改革においても、「創造的」や「創造性」という用語がちりばめられています。しかしながら、私は、これらの用語をあまり信頼していません。

私ができるのは研究についてですが、「独創的な研究をしよう、創造的な研究をしよう。」と考えて、研究をするわけではありません。今そこにある問題を、謎を解くために、頭をひねり、試行錯誤を繰り返すだけです。独創性や創造性を追い求めても、問題や謎は解けません。

私は、創造性は、単に「結果」を評価する言葉だと思っています。つまり、いいものが作れたならば、「創造性があった・発揮された」と後付けで言っているだけだと考えています。この考えに従えば、「創造性」という能力は幻想ということになります。素晴らしい小説が「創造的な小説」と呼ばれ、素晴らしい映画が「創造的な映画」と呼ばれ、素晴らしい音楽が「創造的な音楽」と呼ばれるだけで、それらを生み出す能力はそれぞれ、小説を書く卓越した能力、映画を作る卓越した能力、音楽を作る卓越した能力であり、「創造力」と呼ぶような特別な能力が発揮されたわけではないと思います。一つの能力を突き詰めたところに、人々が創造力を呼ぶ境地があるだけなのではないでしょうか。

もし、この解釈が正しいとすれば、コンピュータが素晴らしい作品を作れば、多くの人々は、コンピュータが「創造性」を発揮したと見なすのではないかと思います。

(佐藤理史『コンピュータが小説を書く日』日本経済新聞出版社、2016)